



山本衛

やまもと・まもる 2010年、司法試験に合格し、司法修習を経て東京で弁護士登録。弁護士登録後は東京ディフェンダー法律事務所に入所し、8年間この事務所で経験を積む。2020年4月に東京有楽町に今西・山本法律事務所を開設。取扱分野は、企業法務・刑事事件・一般民事法務など多岐にわたるが、特に、スポーツに関する法律分野に力を入れている。

インタビュー／三輪記子 みわ・ふさこ 2010年弁護士登録。

中原潤一

なかはら・じゅんいち 2010年、司法試験に合格し、司法修習を経て埼玉で弁護士登録。登録後はいわゆる街弁事務所でも民事・家事・刑事事件を取り扱う。2016年1月に浦和に刑事事件を業務の中心として扱うルミナス法律事務所を開設。同年8月に法人化し弁護士法人ルミナス東京事務所を開設。現在は業務の9割が刑事事件。

日本の刑事司法を変えるために 広く情報発信する

お互いを補完し合う共同受任

三輪 お二人は違うきっかけで刑事弁護に興味を持ち、修習地が一緒で、意気投合したとうかがっています。お二人で事件を共同受任することはありますか。

山本 しています。僕たち、一緒にやった刑事事件は、一審に限りますが、3件中3件で無罪なんですよ¹。

三輪 それはすごいですね。どのような事件でしたか。

山本 1つ目が強制わいせつ否認事件。2つ目が痴漢否認事件。で、3つ目が準強姦否認事件でした。

中原 1つ目は事件性が争点で、あとの2つは、犯人性が争点でした。季刊刑事弁護86号に掲載された『子どもは嘘をつかない』という迷信との闘い』というレポートの事件です。依頼者の自宅で2人の女の子が依頼者から陰部を触られたとされる事件でした。シチュエーションとしては絶望的ですが、山本さんと2人で会議をしているうちに、その2人の女の子の供述を前提にすると陰部を触られたという事実はありえないのではないか、というポイントを発見することができました。

山本 我々にとっては、初めての反対尋問でした。あの反対尋問で勝ったようなものですね。

三輪 2つ目の痴漢否認事件は？

山本 依頼者が正面から目の前の女性のスカートに手を差し入れてわいせつ行為をしたとされる事件です。依頼人は、腕にコートをかけて持っていたと言っていて、それは女性も認めていました。女性は、コートを持った手で触られたと言っていたのですが、身長差がかなりあるので、コートを持ったまま被害部位へ接触することは不可能なように思えたのです。女性のスカートの丈や被害部位の高さは実況見分調書に書いてありましたがかなり適当な図面に見えたので、全部不同意にして検証して計りました。被告人質問のときにA0判のパネルに、物差しのように目盛りを書いたものを用意して、それを利用して、犯行時腕にかけていたコートを持って、「ちょっとやってみてください」といった感じで依頼者に再現してもらいました。裁判官が3人とも法壇の上から降りてきて被告人質問を見てくれました。

中原 私がその主質問を担当しましたが、本当に法廷技術研修で各地で実施しているとおり、まず依頼者に供述をもらって、その供述を明確にするためにパネルとコートを利用して(刑訴規則199条の12)、依頼者が被害者とされる方の陰部を触ろうとすると、依頼者が持っているコートが落ちてしまうということを裁判官に目の前で見てもらいました。また、山本さんが反対尋問を担当しましたが、ここでも法廷技術研修が活きる事態が発生しましたね(笑)。

山本 ぎゅうぎゅう詰めの電車内で、証人も調書ではずっとそう言っていたのに、突然そこまで混んでないって言い出したんですよ。混雑状況は前提だったはずですが、そこは急遽過去の供述を用いた弾論に切り替えて反対尋問しました。あとは弁論ですが、弁論でも被告人質問で用いたパネルを利用して弁論しました。

三輪 弁論でもパネル使ったのですね。3つ目の準強姦事件はいかがですか。

中原 合コンパーティーで泥酔させて強姦したとされる準強姦の事件です。依頼者を含めて2人が捕まっていますが、被害者は、依頼者に強姦されたと言っているのですが、実はもう1人が真犯人という事件です。際立った特徴はありませんが、ラッキーだったのは真犯人が捜査段階で「強姦しました」と自供しているのです。被害者から、「お酒飲んでいて朦朧としていたけれど、1人から強姦された」ということを被害者の反対尋問で引き出して、その現場で強姦したのは1人だということを獲得し、その後、真犯人に、「あなた捜査の段階でこういう話していましたよね」という話をしました。

山本 中原さんが優しく引き出す感じで被害者への反対尋問をやって、共犯者は僕が詰めるというチームプレイでした(笑)。

三輪 共同受任で無罪を争うような事件だと、意見の対立がありそうですが、その点についてはどうですか。

中原 意見の対立ということは、そんなにはありません。たとえば3つ目の事件では、一緒にいた依頼者の後輩(逮捕されていない)が依頼者が犯人であることと矛盾しない供述をしていたので、それは自分に火の粉を飛ばさないための嘘だと主張するのか(後輩真犯人説)、それとも勘違いだと主張するのか、もしくはその後輩の話そのままこちらのケースセオリーに組み込んだ弁護活動をするのかという点については、何度も議論しました。ただ、それで対立するということはありません。2人でベストのケースセオリーを探すだけなので。

三輪 お二人のお互いに「ここが彼のいいところ」や「ここが彼の弱点」といったところはあるですか。

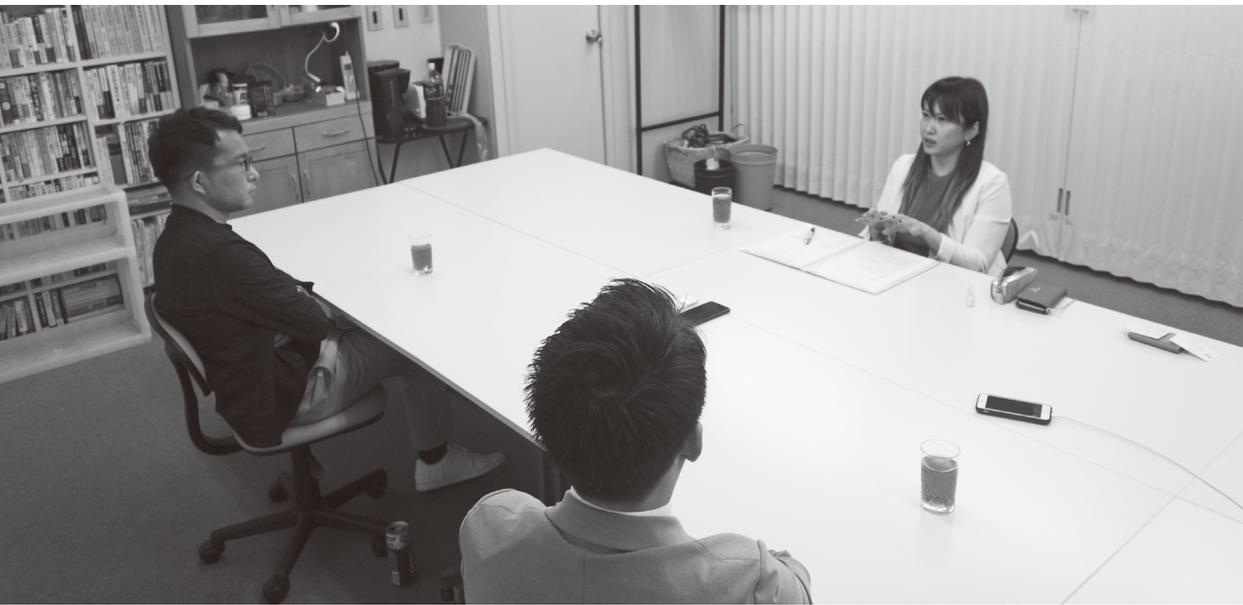
中原 僕たちはタイプが違って、僕は、事件全体を見て事件の大枠を掴むことが得意で、山本さんは個々の論点を細かく丁寧に議論することが得意なので、お互いの弱点を補完する感じで、やりやすいですね。

山本 同感です。

三輪 共同受任で気をつけていることはありますか。

山本 とにかく一にも二にもケースセオリーを共有することです。そのための弁護団会議にかなりの時間を使います。もちろん最終的に証人尋問や起案は分担するんですが、そこで考えていることが少しでも違うと一貫しない弁護活動になりかねない。だから、悪しき分業にならないよう、ケースセオリーを徹底して細部まで共有することを心がけています。中原さんとの共同受任に限らずですが。

中原 山本さんがおっしゃったケースセオリーの共有が最も大事だと思います。次に大事なのは、常に最新



の情報を共有し続けることです。接見報告等も含めて。

見えてきたシステム・制度の壁

三輪 お二人ともたくさん事件を担当され、無罪も獲得されているわけですが、今の刑事司法の問題点ってどういうところにあると思いますか。

中原 刑事司法の問題点は、いくらでもあると思いますが、まずは検察官が公益の代表者という看板を外して、完全な当事者になるべきです。

山本 彼らは、起訴権限を独占しているわけですが、自分たちが有罪間違いないと思ったものだけを起訴するという運用になっている。それが何を意味するかというと、検察官が白黒をつけているということです。しかし、本来白黒つけるのは裁判の役割のはずです。検察官が「公益の代表者」として判断者のようにふるまうことは、裁判を形骸化するものですし、裁判官に有罪の予断を与えます。実際は捜査官であって公平な立場ではないのに。そして、捜査機関としても、真犯人を見逃すという不正義も犯していると思います。もちろん何の証拠もない事件で起訴してはいけないかもしれないけど、少なくともある程度証拠があって立件しているわけですから、検察官が有罪と信じる場所の被疑者は、裁判で白黒つけることを前提に、もっとバンバン起訴してもいいと思います。

三輪 ただ、バンバン起訴したら、被疑者・被告人には不利益が及びませんか。

中原 それは今の人質司法が前提になっていると思います。その人たちが、全員釈放されていけばいいわけです。精密司法とか言って起訴を限定して勾留を続けているからこそ、起訴されたら不利益になるという発想が出てくると思います。そうではなくてほぼ起訴するけど無罪率も50%で、みんな釈放されたとすればどうでしょうか。裁判を受けるという負担はあるけれども、その負担自体がそれほど感じられなくなれば、そっちのほうが公正な裁判になる。

三輪 そうすると、事件報道はどうあるべきだと思いますか。逮捕時から実名で報道されることが少なくないじゃないですか。でも、そのシステムを導入すれば、50%無罪かもしれないにもかかわらず、逮捕の時点で実名報道されるおそれがある。

山本 無罪率50%になれば、裁判にかけられても、実名報道されても、犯人扱いされない社会が来るかもしれないじゃないですか。

中原 現在のメディアは、周りの人、特に捜査機関から聞いた正確ではない情報を、逮捕・勾留時から垂れ流しているじゃないですか。そうじゃなくて、ちゃんと裁判を見て、裁判の過程を報道するようにすればいいと思います。

三輪 あるべき刑事司法のためには、有罪・無罪を事実上検察官が決めている結果になっている現状、人質司法、さらに刑事司法の報道。問題だらけですよ。そこを変えていくために、どうすればいいと思いますか。

山本 実名報道がいいか、検察官の起訴権限が大き

いほうがいいか、起訴率が高いほうがいいか、弁護士でも意見の分かれる問題です。我々のような考え方をする人が情報発信をして、そういう考え方もあるんだということをまず広めることが大切。小さなところから言っていないと、今の話したことを実現するというのは相当難しいと思います。なので、そういう情報の発信を一つの大きな目的にしてK-Ben NextGen、略してケージェネという団体を若手メンバーで立ち上げました²。

三輪 情報発信という点からすると、修習までやり終えた人が司法担当の記者になる。それくらいしないと、既存のメディアは変わらないと思います。

山本 だから、我々が既存のメディアの一つになるのですよ。今はまだ会社ではないけど株式会社K-Ben NextGenの報道部があったっていいわけだから。

改革のための情報発信

三輪 既存のメディアや媒体ではなくて、自分たちで発信をすることについて、どういった意図や効果を見込んでいますか。

中原 既存のメディアだと、我々の伝えたいことが中で編集されてしまうじゃないですか。一番伝えたいことがまったく届かない、むしろ違った形で発信されてしまうこともありうる。とにかくそれをなくしたい。我々が考えたシステムを実現するためには、やはり一般の人に、今の問題を知ってもらうということがまず重要かなと思っています。小さいながら、YouTubeでの配信を始めて、一般の人たちに、できるだけ今の刑事司法の問題点を発信していきたいなと思っています³。

山本 やっぱり刑事弁護人って世間から嫌われる立場じゃないですか。そういう中で耐え忍んでやっていく考え方が多かった。裁判員裁判が始まって、弁護人の役割は、世間には浸透してない。でも、刑事弁護を志す前の自分たちがまさにそうだったように、きちんと説明すれば、普通の人は弁護人の役割を理解してくれるところがあるんですよね。じゃあそういうことを弁護士が発信していきたいとなったときに、いろいろなしがらみがありますから、とにかく自分たちでやっていくしかない。

三輪 若手だけで立ち上げた意味はありますか。

山本 やっぱり大御所がいると、大御所が言うことがすべてになってしまう。とにかく若手だけでやりたい。別に先輩を排除するという意味ではないです。充実した研修実施などのために先輩を頼ることはあると思いま

すが、とにかく運営は若手だけでやりたい。それはこだわりがありました。我々の構成も64期以下になっています。64期が「若手」かは問題ですが(笑)。

三輪 ケージェネの活動は、一般市民だけではなく、弁護士もターゲットとされているのですよね。

山本 修習生の中でも最初から刑事弁護に取り組みたい人はマイノリティーじゃないですか。こんなに魅力的な業界なのに、もったいない話だと思います。たとえば自身がそうだったように、若手や修習生が研修などで刑事弁護人に触れて「刑事弁護人ってかっこいい」と思ってもらえる体験の機会を広く発信する。ケージェネではZoomを用いた研修をやっているのですが、別に新型コロナ問題があったからやったわけじゃなくて、もともとやろうと思っていました。最新のメディアの力を何とか駆使して、地方に刑事弁護技術を届け、修習生にも刑事弁護の魅力を届ける。そういうことを広くやることによって、地方の刑事弁護が活性化していったり、修習生で刑事弁護に興味を持っている人たちを増やしていったりしたいですね。

中原 有料ですが、地方からでも修習生でも気軽に参加できるようにオンラインサロンをやっています。利用者はウェブ上で聞きたいことをすぐ聞いて、運営者は定期的に刑事弁護に役立つ情報を発信しています⁴。すでにかなり遠方の弁護士も入ってくれています。司法修習生にも開放はしていますが、「さすがに入ってくれないかな」と思っていたら、すでに何名もの修習生が入ってくれました。もともと興味を持っていた人も、修習で興味を持った人、配信を見て興味を持ってくれた人、研修を見て入ってくれた人。さまざまな背景がありますが、皆さんフットワークが軽いと思います。これが我々が目指しているところの第一歩だと思います。

1 インタビュー日の2020年5月20日現在。

2 K-Ben NextGen<<https://k-ben-nextgen.com/>>、Twitter<https://twitter.com/k_nextgen>。本誌122頁参照。

3 Youtube<<https://www.youtube.com/channel/UCkMkXt72cZ28kZX-zuUSGAZg/>>。

4 オンラインサロン<<http://k-ben-nextgen.com/online-salon/>>。

インタビュー募集

このコーナーでは、インタビューをしてくださる弁護士の方を募集しています。ご希望の方は、インタビュー対象の弁護士(同じ、または近隣の弁護士会所属の方に限ります)のお名前を明記のうえ、聞きたい内容を簡潔書きにして以下の連絡先にお送りください。

現代人文社 季刊刑事弁護編集部 担当: 齋藤

FAX: 03-5379-5388 メール: saitoh@genjin.jp

※ 交通費(実費)のほか、インタビュー・対象者ともにそれぞれ謝礼として1万円(手取額)をお支払いいたします。